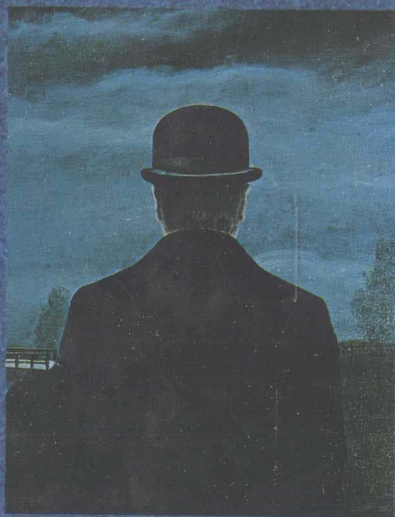


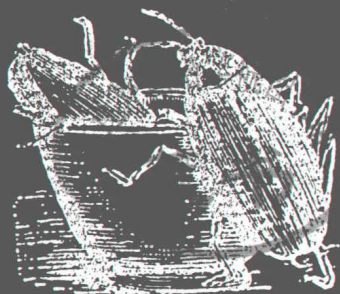
わが小泉八雲

佃 実夫



小泉八雲

佃 実夫



河出書房新社

わが小泉八雲 ©1977

昭和五十二年二月二十三日 初版印刷
昭和五十二年二月二十八日 初版発行

著 者 佃 実夫

発行者 佐藤皓三

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都新宿区住吉町九五

電話(〇三)三五五―五三一―

振替(東京)〇―一〇八〇二

印刷 曉印刷

製本 中西製本

定価はカバー・帯に表示してあります

目次

零^{ゼロ}から零へ 5

鴉^{レイブン}は飛ばずや 21

塔から眺めて 137

さらば友よ 191

わが小泉八雲

零ゼロから零へ

一八七×年

月 日

手の印象が消えぬ。素晴らしく綺麗な手であった。すんなり伸びた指先に、桜貝のような爪が輝いていた。

瞬間おれは、眩暈に似た衝撃を受けて自失した。顔の記憶はほとんどない。華奢で小さい女であった。ガラスのドアが珍しいらしく、指を揃えた掌が、その空間を遮っている透明な物質を確かめるふうに撫でていた。きっと、世にも不思議だ、という表情を泛べたと思うが、支配人に命じられて、フロントの鏡を磨いていたおれのところから顔は見えなかった。一度、こちらへ振り向いた。双眸の黒い輝きが美しかったような気がするけれど、おれは片眼で近眼だ。空想したにすぎない。顔の色はさほど黒くなかったと思う。支那人であろうか。太っちょの亭主が、氣どった恰好で懷中時計の金鎖をいじりながら、ちょこまかした足どりで出て行った。背の低い、ちよūdおれくらいの小男である。女はすぐ男を追ったし、チップをたんまりせしめたらしいボーイ長が、巨大なトランクを提げて従っていたから、その蔭にかくれて見えなくなった。追っかけて行つて、馬車に乗るところを眺めたかったが、安心して手を休めていたからだらう、支配人

の怒声が落ちてきた。

支配人のやつ、口を開いたら、チビめ！ 働け！ という。おそろしく語彙の乏しい野郎で、これでよく支配人がつとまると感心する。使用人は使わねば損だと固く信じていて、三人前くらい働かせようとする。

とくにおれを嫌い、チビめ、片眼めと口汚く罵倒する。確におれはチビで片眼だ。虹彩のうえに白い膜のかかった左眼は、機能を失っていて醜い。それに、東洋人の血が半分混じっているおれは、イギリス人だというのが気はずかしいほど小さいし、色も浅黒い。だが、おれの最も卑下している背と眼のことを、一番堪ええると知って揶揄するのは許せない。今、反抗して鹹首になると、再び飢えがやってくるから何事も我慢するしかないが、この旅館を辞めるときには思い知らせてやる。

鏡を磨く仕事はすぐ終わったが、次から次へと、くだらない仕事でこき使われた。だが、あの女の手を見た陶酔は終日あとをひき、何となくおれを倅せにした。実に不思議な気持である。そして、いつの日か、あのように美しい手を持った女を妻として、平穩の日々を送ることを夢想していた。

月 日

きのうの女のことをボーイの一人に訊いたら、ジャボンだという。なるほど日本の女性か、と何となく納得がいった。亭主は日本の役人、元は武士で、最後の將軍に仕えていたとか。あの客が自分で吹聴したのだろう。ちくしょう！ 二晩も泊っていたのか、そうと知っていたら、掃除などにかこつけて出入して、あの美人をもっとよく見る方法もあったのに。

おれは日本の女を妻にするぞ。華奢で、抱きしめたら、ボキボキ骨の折れそうな、手の美しい女を！

屋根裏の、それをも部屋と呼べるなら屋根裏部屋の藁のなかで、おれは大声で叫んだ。隣で老馱者が、少し酩酊して眠っている。幸いかれは目を覚まさなかった。煙草を吸いすぎて胃のなかがおかしい。けむりでごまかしているが、すぐく腹が減っている。

徒手空拳、零から出発だ、とアメリカへ渡ってきて、ニューヨーク暮らし半歳。ちっともいいことはない。失意と空腹の連続だ。この、ダウンタウンの旅館へ備われて、かろうじて雨露をしのぎ、貧しい食事にありついているが、みじめさはちっとも変らない。ニューヨークは嫌な街だ。怠惰と無気力の滓場。世界じゅうの難民の巢窟だ。うわべの繁栄の蔭にある不毛と虚飾。石と煉瓦と鉄の近代的市街が灰色に見え、ふいに廢墟とも感じられることがある。やはり、西へ行くべきであろうか。シンシナチへでも。活力あふる新しい街へ。

調理室へ忍びこみ、豚の骨を掠めてきた。嬰兒が、ひからびた乳房にむしゃぶりついているかのように、豚の骨を吸う。だしを取ったあとの、味もそっけない骨だが、そぎ残しの肉や筋もくっついていて結構気分がまぎれる。あの手が鮮明によみがえる。古びた藁のにおいのなかで、我慢ならなくなつて瀆そうとした。藁がカサカサ鳴る。

衝きあげてくる欲情があるのに、ろくな喰いものにありついでいない激務の日々は、おれの体から分泌物を奪ってしまったらしい。いらいら渴くだけだ。馬鹿らしくなつて止す。

月日

仕事をつらいと思わぬが、腹の減るのはつらい。今夜は何も盗めなかった。やむなく水をがぶ

飲みし、菓を噛みながら眠れぬ眼を閉じる。本が読めぬので、だんだん馬鹿になるような気がする。灯火すら与えられない生活。

月 日

あの手に似た手を、ずっと以前に見たことを思い出した。

幼い頃だ。父母が離婚して大叔母にひきとられ、ダブリン市のアップパー・リーソンの町や、アイルランドのトレモア海岸や、サレー州レッドヒルに在った大叔母の親戚ヘンリー・モリヌークスの家に、かわるがわる暮らしていた時代。毎夏、セント・ジョージ海峡を渡った対岸のバンゴアに遊んだ。セント・ジョージ海峡の横断遊びが、イギリス上流人士のあいだに流行していた。バンゴア近郊のカルヴァノン城で、初めて東洋の美術品を見た。また、乳母の知り合いに、支那航路専門の船長がいて、そこでも、美術品や骨董などの東洋人の偶像の数々を見せて貰った。それらのなかに、あの手のような彫像があった。

帽子のようにも見えるひどく大きい髪を結った半裸の女が、膝を組んで坐り、首をかしげていた。右手を曲げて頬に当て、その手は親指と小指で小さな円をつくり、残る三本の指を綺麗に揃えて伸ばしていた。あれは仏像だったのだろうか。あの手と同じだ。東洋人の……。

疲れているのに眠れない。あのように美しい手は、イギリスでもフランスでも見かけなかった。広いアメリカでも少ないだろう。広いアメリカ……と言ってしまつて笑った。まだ、ごく一部をかいま見たにすぎぬ。それもニューヨークのごく一部、ブロードウェイ、ウォール街、マンハッタンの裏町、支那人街などだ。おれもその一人なのだが、世界じゅうの喰いつめ者どもが蟬集している。プエルトリコ人、イタリア人、フランス人、イギリス人、ドイツ人、ノルウェー

人、黒人、東洋人……、まるで人種の見本市だ。嫌な街ニューヨーク。猥雑で、喧噪で、頹廢的な。

漠とした希望を抱いて、あわよくば幸運の未来を掴み取ろうとやって来たおれ。未だフロンティア精神はしおたれていないが、徒勞にも似た泥沼の日々である。だが、未来はわからぬ。おれは栄光を握ってみせる。必ず！

本が読めぬのは苦痛だ。折角フランスで買い込んだゴーチエやヴィクトル・ユゴーやフロールやボードレールの本も、質屋の蔵で埃をかぶり、あるいは旅行鞆の底で惰眠をむさぼっている。フロールやゴーチエの翻訳は、当地では未だ行われていない。早くやって、うまく売り込んだら、金になるに違いないのだけれど……。

月 日

大叔母の破産する前はよかったな。少なくとも飢えを感じることはなかった。人のいい、諸事に鷹揚だったサリー・ブレネン大叔母の、優雅な、それでいてどことなく憂愁のかげりを帯びていた顔が泛んで消える。ディオ……と、優しく呼びかける声もきこえるような気がする。

破産のあと、モリヌークスの好意でフランスへ行かせて貰った。フランスは悪くなかったが、入れられた旧教の学校は気に喰わなかった。アメリカ行きをすすめたのはモリヌクスだ。かれにとっては、一種の厄介ばらいであつたらう。冒険心をちょっぴりそそられて、おれはモリヌークスの言に従った。妹婿のカリネンを頼って行くように、とかれは言ったが、カリネンを当てるつもりはない。カリネンはシンシナチにいる。いずれ、一度は会わねばならないだろうけれど。

父母の離婚——それは父の浮気のためであつた。相手の女を、幼い頃おれは見たことがある。美しい女だ、と思つた記憶があるけれど、今はその女も、父も憎い。おれの運命をねじ曲げてしまった父を、おれは生涯許さぬつもりだ。好き勝手に振舞い、好色の果てに妻子を捨て、今はもう墓場へ行つてしまった男——。もう止そう。過去をあれこれほじくつても詮ないことだ。目覚めていると、よけい空腹が堪える。ともかく眠ろう。早朝のストーブの掃除とボーイ長の怒声待ちかまえている。

月 日

無為の連続——。ストーブをたきつけるのが上手になつただけ。相変らず無計画にこき使われる。一日も早く、ここを脱出したいのだが、寒さも寒し金もなしだ。

午後の掃除を手早く片づけ、避難階段の日だまりに隠れて雑誌を読んでいたら、五頁も読まぬうちにボーイ長にみつけられた。まるで、四六時ちゅう監視しているみたい。嫌なやつだ。支配人と二人がかりで、たつぷり油をしぼられた。「鹹首だ！」と何度もわめく。恐がると思つてゐるのだ。わざとふてくされ、片手をポケットへ突っこみ、肩をそびやかしてお説教をきく。態度が悪い、と雑誌を取り上げられてしまった。なけなしの財布をはたいて買った雑誌。フランスに、エミール・ゾラという風変りな、元気のいい新人作家があらわれたという紹介記事が出ていた。お説教の報復にチーズの塊を盗んできた。久しぶりに満腹できそうだ。藁の寝床をととのえながら、思わず口笛を吹いたら、老奴者のやつ、「小僧うるさいぞ！」と怒鳴った。愛想の悪い老奴だ。毎晩一緒に寝ているのに、ちっとも心を開こうとしない。おれのほうもだが。

月 日

明け方、鼠がさわぎ出して目を覚ます。雨が屋根を叩き、変に空気が温かかった。

ここの鼠ときたら、人間など、そこにいるかとも思わぬ様子で、傍若無人に駆けめぐる。おれと老人の上を、顔といわず胸の上といわず、駆けのぼり駆けおり、ひょいと跳びこえていく。藁がガサガサゆれ、埃が舞いあがる。鼠たちは一様に肥え、丸揚げにしたらうまそうだ。毛までつやつや輝いている。

眠れぬので便所へ行き、ついでに水をたらふく飲んでくる。本当はコーヒーでも飲みたいところだ。もう一度、藁のなかへ転がったが、眠れぬので、アイルランドの大叔母に泣きつくことを考えた。破産したとはいえ、おれの窮状を救うくらい力はあろう。思い切って手紙を書く。駅や公園のベンチで寝ていた昨秋のことは書かなかった。とても信じて貰えまい、と思ったからだ。そのあと、日本のことを空想して時間を消した。美しい田園……イギリスのような気候、あるいは、もっと温暖か……空がいつも青く、太陽がさんさんとふっている……山と川と海があって、男のためにのみ生まれてきた美しい乙女たちが嬉々として戯れ、あるいは男にかしずいている……要するに、お伽の国のような光景……。

鼠を何疋か生け捕り、調理室へ放ち、混乱に乗じてパンやチーズやハムを掠めることを思いつき、鼠とりを物置から持ち出し、天井裏や倉庫に仕掛ける。

月 日

鼠が三疋かかった。掃除用具格納室の奥の押入へ鳥籠を置き、そこへ捕獲した鼠をたくわえることにした。少し飢えさせてから作戦開始といこう。

ニューヨークへ着いてまもなく、持ってきた僅かの金は無くなった。働くことにして、初めてみつけたのはパン屋の見習いの口だったが、三日目に放逐された。公園などで寝ていたあいだに、悪性の風邪をひいていたのだ。すごい熱を出し、ゴホン、ゴホンと咳くものだから、鹹首^{かんび}になった。熱のある体を、ウォール街の横丁の壁と壁の隙間に横たえたが、石畳の上に寝ていると悪寒で死にそうだった。寒さ防ぎにおれは、深夜の舗道で駆け足をはじめた。呼吸は苦しかったが暖かになった。汗を拭いながら、なおも駆けつけた。深夜の街は墓場のようで、ビルの谷間はただ暗かった。

おれは駆け足で風邪をなおした。

つぎに新聞店へ傭われたが、地理不案内のおれにできる仕事ではなかった。店の少年たちに嘲笑されながら、五日がんばってみたが駄目。癪にさわったので、給料を貰わないで辞めた。新聞の求人欄でみつけてある商事会社へ行った。すぐ採用されたが、算数の不得手なおれにはこも向かなかった。小学生のときから、自分であきれるくらい計算ができぬ。会社は一週間我慢してくれたが、週給を渡しながら、他で口を探してはどうか……と言った。もつともだ、とおれは忍耐づよい会社に同情したものである。

ああ腹が減った。あのパン屋の、ウインドーの白いパンやケーキが眼の先をチラチラする。鳥籠の鼠が喰えるのだったらなあ。

月 日

弱いやつだ、二足死んだ。

ナイフで料理し、肉をポケットに忍ばせ、調理室のミンチ用精肉のなかへ投げこんできた。今